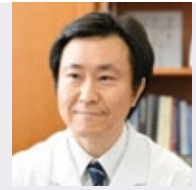




病院長からのメッセージ

北海道医療大学病院は、職員投票で選ばれたキャッチコピー「地域とともに育む信頼の医療と支えあう福祉」「みんなの思いを集めた医療、ここにあります」のもと、一致団結して良い医療機関・良い教育機関であること、同時に良い職場でもあるよう、努力しています。これらは両立できる、いえ、本来は両立するはずで、おかげさまで診療実績も急上昇しておりますが、その過程で一人一人が成長できなければ意味がありません。自分だけで成長しようと思っても無理で、仲間みんなで成長し、是非ここからどんどん全国・世界へ羽ばたいてほしいと思います。ここに集う職員や学生が夢を持ち、そのチャンスをつかめる場所、そんな病院をめざしています。



きただち のふよし
病院長 北市 伸義

NEWSトピックス 高次脳機能障害(もの忘れ)外来

昨年11月に、高次脳機能障害(もの忘れ)外来が、開設されました。外来日は毎週火曜日午前で、地域連携室経由での完全予約制となっております。高次脳機能障害といっても馴染みがない方もおられると思います。高次脳機能障害とは、例えば脳梗塞などが生じると、言葉がでてこない、あるいは言葉の理解ができない、道がわからなくなる、ものが覚えられない、すぐ忘れるといった症状をさします。大脳が損傷されて生じる症状すべてをさしますので、したがって認知症もこれに含まれます。この外来では、高次脳機能障害を評価することで、現時点での状況や原因疾患を把握し、それに

より薬物治療やリハビリテーション(言語聴覚治療室との連携)、これらの悩みをお持ちの方を手助けする公的な援助(社会資源等)の活用(地域連携室との連携)の可能性を広げたいと考えます。

当外来は、このような目的で開設されたため、精神科疾患の診断や治療は行いません。また夜間や入院での対応はいたしていません。MRIやSPECTを用いた検査などが必要な場合には、他病院と連携しながら、地域へのお手伝いを主たる任として医療を行っていきたくと考えております。

なかがわ よしつぐ
高次脳機能障害(もの忘れ)外来担当医師 中川 賀嗣

リハビリテーション室紹介 「野球肘検診」報告

リハビリテーション室ではあいの里地区の野球チームを対象に、少年野球肘検診を毎年行っています。今年度は12月9日に北海道医療大学病院地域包括ケアセンターで28名の選手を対象に行いました。

検診内容は身長・体重・四肢筋肉量の計測、超音波エコーを用いた肘関節骨軟骨障害の検診、理学療法士と北海道医療大学の学生による四肢体幹の柔軟性、筋力、パフォーマンスチェック、高速度カメラを用いた投球フォームチェック、理学療法士による野球肘についての講演とストレッチ指導です。検診スタッフは整形外科医1名、看護師1名、理学療法士3名、大学院生4名、本学理学療法学科学生7名、本学理学療法学科教員2名が参加し、今年度からは学生ボランティアにストレッチ指導や計測補助に加わってもらい、スポーツ現場での理学療法士の活動を経験してもらいました。科学的に正しくスポーツを楽しんでほしいと思います。

やまね まさひろ
リハビリテーション室 理学療法士 山根 将弘



地域貢献活動報告 「1日歯医者さん」報告

1月8日、冬休み恒例地域連携企画「1日歯医者さん」が開催され、小学1~3年生の9名が職業体験に参加しました。参加者は、川上副院長の合図で子ども用白衣に着替えると、最初に歯科技工士と歯型を取るアルジネート印象材で自分の指の型取りを行い、石膏模型を作製、次に臨床検査技師と口の中の細菌を顕微鏡で観察しました。さらに齊藤小児歯科医長に教わりながら、3人一組で患者と歯医者役になり、歯科ユニットで互いのブラッシングや人工の歯を削り治療用のプラスチックを詰めるむし歯の治療体験をしました。病院探検としてリハビリテーション室や放射線部など見学した後、北市病院長から一人一人に修了証が手渡されると、子どもたちからは「楽しかった」「歯医者さんかっこいい」「石膏の指の模型、本物みたいですごい」「顕微鏡が面白かった」などの感想が聞かれました。

これからもこの企画が子どもたちの「歯の大切さ」や「もっと知りたい」などへの興味の深まりにつながればと思います。

よしの ゆか
医療相談・地域連携室 医療ソーシャルワーカー 吉野 夕香

